

反障害通信

25. 7. 18

176 号

ファシズムの蠢動としての右派ポピュリズム —参政党、維新の会、国民民主、旧自民党アベ派—

今、参議院選挙真っ只中で、参政党の躍進が危惧されています。多くの論者がすでにいるような角度から警鐘を発信しているのですが、そして、警鐘を鳴らすことが、余計に右派ポピュリズムに注目を喚起することの危惧も語られているのですが、ファシズム論的観点から問題をとらえてきた立場から（註1）、敢えて文をおこして、論的深化をなしておきたいとこの文を書いている次第です。

歴史は繰り返される

そもそも、自民党が政権から滑り落ちた中で、安倍元首相が 2012 年自民党総裁選挙で復活し、自民政権に戻ってきたとき、欧米では、日本で極右政権が成立したと騒いでいたのです。日本の比較的リベラル系のマスコミはヨーロッパの極右の動きを警戒心をもって報じているのですが、自分たちの国におけるファシズム的動きを押さえ報じることをネグレクトしてきました。この第二次安倍政権の成立の際に、大阪で「維新の会」が旗揚げしていて、盛んに安倍元首相に秋波を送っていたのです。維新の会は、原発事故が起きて、脱原発、地方分権、行政改革とまさに当事話題になっていた政策を、ポピュリズム的に掲げ大阪の地方自治から関西へ勢力を拡げていきました。今日的にとらえると、原発政策は推進派に転換しました。地方分権は大阪都構想という東京に対する対抗意識で関西ナショナルスティックなポピュリズムで煽り、地方分権とは言い難い二極的中央集権にしようとしただけです。行政改革は大阪の地方公務員の「特権」なるものをスケープゴートの叩き、リベラル系のマスコミ叩きをしてマスコミ総体を萎縮させ、ファシズム的支配の構造の中に叩き込んだのです。敵を作り、スケープゴートの叩くという手法は、まさにファシズム的手法なのです。

今日、参政党がオーガニックや反ワクチンなどでポピュリズム的に支持層を拡げながら、国家主義的なところで、「日本人ファースト」という差別排外主義そのもので、敵を作っていくという維新の二番煎じのファシズム的政治で支持を集めようとしています。

国民民主は、玉木党首が右派ポピュリズム的手法をNHK党の立花孝志から学び、差別主義的な敵を作ることによって支持を集め、支持を取り込もうとしています。外国人排斥という右派ポピュリズムのマニフェストを出そうとしています。支持母体の連合との関係でかろうじて抑え込んでいます。玉木党首自身は右派ポピュリズムなのですが、国民民主は労働組合を背景に持ち、かろうじてファシズム的なところを抑え込んでいる状況です。

アベ派はまさに自民党内の保守派を押さえ込み、時には、保守から支持を得るために、自らの極右政治の支持をえるために、保守政治なことをも言い募り、結局アベ政治の失われた 10 年を生み出したのです。

ファシズム論からの論点整理

そもそも、リベラルな学者も含めて、左派、リベラル、保守、右派、極右＝ファシズムというとらえ方があいまいなままです。例えば、トランプのファシズム的支持層を「岩盤保守層」と言い方がリベラルなジャーナリストからも出されているのですが、そもそも保守というのは、現在資本主義社会では、資本主義社会の保持ということを経済の課題とするということです。それは、時には「自由と民主主義」とか、「法と秩序」とか、「国民の命と生活を守る」ということも含んでいるわけです。トランプ政治は、「法と秩序の破壊」というところに踏み込む、右派政治どころか、極右＝ファシズム政治で、「岩盤保守」という詞が当たりません。ファシズム論がないところで、状況分析が的確になされていず、きちんと批判の鋭い提起が成されていないのです。日本におけるファシズムの動きの代表格の橋元徹元大阪市長・元大阪知事が、「ファシスト規定されることは欧米では政治的死を意味するから、安易にファシズム規定するべきではない」という話をテレビでしていました。まさに、ファシストは、本格的な始動以前の右派ポピュリズムの動きの中では、ファシズム規定されることを畏れるのです。ちゃんとファシズム規定をしきりの中で、ファシスト達を政治的に葬り去る作業をしていかななくてはならないのです。

ファシズム論自体の整備

もう一つのファシズム論を巡る混乱があります。それは、ハナ・アーレントが全体主義という概念で、ファシズム概念を括ってしまったことです。それは、ソヴィエト・ロシアが社会主義の定立に失敗した国家資本主義でしかなかったのに、それを「社会主義」として規定し、しかも、その「社会主義」を全体に奉仕する個人という二項対立的なとらえ方をすることで、全体主義規定をしたことがありました。ファシズムは、決して個人の利益を減して全体に奉仕するという体制ではないのです（註2）。個人の利益をきちんと追求しているのです。それはトランプ・ファシズムがアメリカ・ファーストを突き出しつつ、トランプ・ファーストになっていることと同断でもあります。

国家主義批判と反差別という地平からのファシズムの蠢動—右派ポピュリズム批判を！

問題は、反差別という地平が確立できない中で（註3）、安易に敵を作るという手法に民衆の浮動的な層がのってしまふことにあるのです。ファシズムに共通することは、国家主義・超国家主義と差別主義です。そのことをきちんと押さえたところで、国家主義批判と反差別ということでの突き出しが、今こそ問われているのです。

（註）

1 わたしのファシズム論は試論的に書き綴って、弁証法的に深化させようとしています。反差別資料室C <https://hiro3ads6.wixsite.com/adsshr-3>

→B.「反差別原論」への断章 <https://hiro3ads6.wixsite.com/adsshr-3/d> を参照ください。

2 これは、小説ですが、ナチスの隆起と滅亡を描いた「ベルリン三部作」とでも言うべき、作品の中で、クラウス・コルドンが描いています。

「通信」131号 <http://www.taica.info/adsnews-131.pdf> 参照。

3 わたしはそもそも人権論などというキリスト教文化圏、すなわち「帝国主義」中枢国の論理で差別の問題をとらえてきたところで、自民党右派から「人権などというのは架空の概念だ」との批判もでてるように（註4）、人権論では差別をきちんと問題にし得なく

なっていることがあるのだとも、押さえています。反差別論という形できちんと展開していくことだと念っています。

4 人権とは差別のない関係を物象化した謂いです。だから、自民党右派の「架空の概念だ」という批判には、では、差別をストレートに容認するのか、と反批判していくことです。差別という暴力を容認すること、これも物象化した謂いですが、「ひとは〇〇する動物である」という規定を引用してみると、ファシスト達の論理では、きっと「ひととは同種で殺し合う動物だ」となるのでしょーファシスト達は、「障害者」や高齢者を社会に迷惑な存在として突き出していくのですが、実はこういうひとたちが、社会にとって一番迷惑な存在なのです。これについては、次号巻頭言「なぜ、差別の極としての戦争をなくせないのか？」で続きを書きます。

(み)

(「反差別原論」への断章)(104)としても)

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

- ◆「反障害通信 176 号」アップ(25/7/18)
- ◆「反差別資料室C」の「文献室」、新しい本の購入や読書に合わせて、今年4月初めに1年ぶりにリアップしました。
- ◆メインホームページ「反障害－反差別研究会のHP」のIV．F〔廣松ノート〕
<http://www.taica.info/hiromatunote.html>に『存在と意味 第一巻』をアップしています。
<http://www.taica.info/hironosoni.pdf>

読書メモ

連載中の〔廣松ノート(8)〕の『存在と意味2』の1回目・2回目。

たわしの読書メモ・・ブログ 706〔廣松ノート(8)〕

・廣松渉『存在と意味2—事的世界観の定礎』岩波書店 1993(1)

『存在と意味』の第二巻です。ただ、二巻の二篇で終わっています。二巻の三篇と三巻が未完のまま、筆者の廣松さんはその生涯を終えています。二巻の第三篇は「第二巻(続)」として出す予定だったようですが書かれてません。「目次」には挙げられていますので、書き記します。

一卷に続いて、全面打ち込みます。この巻も、「序文」に「本論の各節の頭初に数行分程度の梗概風の文書が配してある。それら梗概風の分掌は、必ずしも当該の節における論述内容の概要ではなく、論件を提示したものであって、謂うなれば“長大な標題”に類するものと諒解いただきたい。……」と誌してあります。それを「(この節の問題設定—長い標題)」として置きます。この著も「項」に小見出しがついていません。著者が第一巻

に「尚、本書の各節は、明示的には「項」に区分されておらず、従って「項の標題」は欠いている・・・・・・」x v-viP と誌しています。第一巻と同様わたしが小見出しを付けます。「わたしの基礎的積み上げのない読解力では誤読しそうで、余計なことをするべきではない、まさに蛇足の類いですが、かなり練った論攷で展開されていると感じていて、小見出しが有効になると思い、学習ノートという性格からして、あえて斜体で項目の見出し付けをやります。」という主旨です。なお、第一巻は「項」にあたる段落は、ヘーゲル弁証法を想起させる各節基本三段落だったのですが、第二巻にはそのようなことは見当たりません。各段落で第一巻と同様な「対話」を試みます。本文小文字は「(小さなポイントの但し書き)」という但し書きをつけて、ポイントを変えないで普通文字にしています。

最初に「序文」があるのですが、「目次」を先に取り上げます。

改行ごとに論旨がはっきりしている場合も、波線で論旨の表記的なこと（詞をつなげればその行文の標題的なことになる）を試みます。強調と波線が重なったときは、二重線になります。

また、この著は著者の他の著作参照や既にかいたところ、それからこれから書くところ参照という記述が多くあります。それらのことを□で標記していきます。（序文はそもそも著者の旧稿紹介の個所が多く、煩雑になるので、本篇からにします。）

この巻には緒論はなく、序文が最初にあるのですが、ここでは最初に「目次」をあげます。

目 次

序 文

第一篇 用在的世界の四肢構造

第一章 用在的分節態の現前と財態の二要因

第一節 用在的財態の二肢性

第二節 財態の第一肢的実在

第三節 財態の第二肢的価値

第二章 自他的分極性の現成と主体の二重性

第一節 能為的主体の現前相

第二節 役割的行動と人格化

第三節 人格的主体の二相性

第三章 用在的世界の四肢的相互媒介の構制

第一節 財態的二肢制の構制

第二節 主体的二重性の形成

第三節 四肢の相互的媒介性

第二篇 営為的世界の問題構制

第一章 環境と主体の分截と実践理論の図式

第一節 環境と主体との分截

- 第二節 <三項図式> の形成
- 第三節 実践論の基幹的構図
- 第二章 役割行為の相互的構造と協働的態勢
 - 第一節 役割行為の存在構制
 - 第二節 役割遂行の相互構造
 - 第三節 役割協働の存立性
- 第三章 実践の間主観的規制と規範的当為性
 - 第一節 決意的企投の呼応性
 - 第二節 規矩形成と規則随順
 - 第三節 間主観的妥当と正義

第二巻(続)目次予定

第三篇 制度的世界の存立機制

- 第一章 制度的世界の存立態勢と動態的遷移
 - 第一節 制度的世界の編成相
 - 第二節 舞台的構造の変動性
 - 第三節 遷移的動態の形象化
- 第二章 役の物象化と実体主義的錯認の位相
 - 第一節 役の既成化と自存視
 - 第二節 組織の分凝と機能態
 - 第三節 階層構造と価値様態
- 第三章 体制の生態系存立と環界の全一性
 - 第一節 環界的実在の存在性
 - 第二節 存在と間主体的営為
 - 第三節 主体と境位の一体性

「解説 熊野純彦」(『廣松渉著作集 16 「存在と意味(第2巻)」』岩波書店 1997)

「解題 小林昌人」(『廣松渉著作集 16 「存在と意味(第2巻)」』岩波書店 1997)

序 文

第一段落——第二巻発刊に際して v・vi P

(対話①)「第一巻を上梓して以来満十一年間を閲(「け」のルビ)みして、今茲に第二巻を江湖に送り、叱正を仰ぐ機会を得ることが漸く叶う段となった。」 v P

(対話②)「第二巻の公刊が遅延したのは、菲才と鈍重のしからしめるところとはいえ、未定稿の自家点検と補全とにと予期以上の時間を要した所以(「せい」のルビ)である。著者はこの十年間に一万枚を超える原稿を執筆し、十余冊の拙著を余に問うて来たが、これらの大半は本第二巻および第三巻の準備ないし脇固めの作業に応ずるものであった、と言うことができる。労苦のみ多くして成果に乏しきことを只管(「ひたすら」のルビ)に惧れる。」 v P

(対話③)「本巻の論述は、素より第一巻を承けてのものであるが、読者におかれては一応独立の著作として繙読(「はんどく」のルビ)頂けるのではないかと念う。行論も第一巻の場合よりも遙かに平明になっていることと信じる。それゆえ、序文中において事前に導入的な言辞を綴ることはしない。また、第一巻でのごとき緒論を設けることなく、直截に本論に委ねる。」 v P

(対話④)「本論の各節の頭初に数行分程度の梗概風の文書が配してある。それら梗概風の文章は、必ずしも当該の節における論述内容の概要ではなく、論件を提示したものであって、謂うなれば“長大な標題”に類するものと諒解いただきたい。——“標題”であるから、それだけで以って、つまり、本文との反照なしには、文意不明・難解の印象を与える節々もありえようが、その節における主要な論件が何であるのかを事前に識っていただく縁(「よすが」のルビ)とはなりうる筈である。——この数行分の文章を「未定義語の重畳であって文意不明」という廉(「かど」のルビ)で放擲(ほうてき)されることなく何卒(なにとぞ)適宜に本文との反照を願い度いと念う。」 v・vi P

第二段落——いろいろな(現にある、予期される)批判への応答 vi・viii P

(対話①)「本第二巻が「実践的世界の存在構造」と題するからといって、よもや「政治的・社会的革命運動」の戦略・戦術論のたぐいの直接的な主題化を予期される読者はあるまいと信じるが、哲学系の読者の中には、道徳的实践論・倫理学を予期されるむきもあるかもしれない。実践哲学といえ、従来ともすれば、道徳哲学に“矮小化”される憾(「うら」のルビ)みのあった事情に鑑みると、それもあながちに謂われなしとはしえない。が、しかし、著者としては、倫理の問題は、第三巻「文化的世界の存在構造」の第二篇「人倫的世界の存在構造」中において主題的に論攷する予定であり、本第二巻においては、道徳的行為や倫理の一斑を配視はしても、道徳的实践論や倫理学は直接の主題ではない。この点、予め御諒承を得たい。」 vi P

(対話②)「此の第二巻での主題は、旧来の学問分類に対応づけていえば、むしろ「社会行為論」ならびに社会的行為連関の物象化された「社会制度論」と相覆う部面が大きい。——そして、その部面に関わる限りで、道徳的行為論に対しても一定射影からの基礎理論としての意義を有つ。——とはいえ、本二巻が「実践的世界の存在構造」と題される所以でもあるが、それは常套的な社会行為論や社会制度論の枠組みに納まるものではない。社会学者諸賢の眼からは、社会哲学ですらなく、所詮は哲学屋による一種の世界観的談義にすぎないものと評されかねないことを畏れる。」 vi P

(対話③)「著者の心算(「つもり」のルビ)では、しかし、本巻の論述内容は決して世界観的抽象談義ではない。なるほど、本書は、社会学者ばかりでなく社会哲学者たちですら往々にして“既定の事実”と見做し大前提に据えてしまっている場面・次元にまで遡って再検討しつつ、パラダイムの再構築を図る。旧来のヒュポダイムに安住している人々の眼からすれば、「土台の無用な掘り返し」「一路前進すればよい所でバック・ギアを入れての背進」と映じ、随所で無用な哲学的拘泥(こうでい)の印象を与えるかもしれない。——例えば、実践的世界の“価値附帯性”を「物理的実在が偶々(「たまたま」のルビ)斯々に一定の価値を帯びた相で現われるにすぎない」と了解して済ませている論者たちの眼には、本源的価値性とその汎通的存立構造などに「拘泥して論ずる」ことは退屈きわまりないスコラ的談

義に映ずることであろう。また、例えば、「他我認識が可能なことは自明の事実だ」と前提し、「人間には自由意志があり、精神的作用力が身体を因果的に操縦できることも不可疑だ」と前提して社会行為論に邁進する“良識的”な論者たちに言わせれば、「他我認識や心身問題は哲学的には厄介な問題かもしれないが、棚上げしても行為論には不都合を生じない。そういう哲学談義は、退屈なだけで、無用無価値だ」ということになる。——だが、しかし、著者としては、“退屈で無用なスコラ談義”と評されようとも、世界の本源的な価値性とか他我認識問題とか心身問題とか、このたぐいの諸問題に“拘泥”しつつ議論を選ばざるをえない。それは、何も、このたぐいの諸問題が哲学上の重大な難問として「哲学者たちのあいだでのホットな係争問題」であるから避けて通れないといった問題史的な事情だけに因るものではない。哲学界において自覚化されているこれらの難問を解決して掛かることが、社会哲学のみならず社会諸科学次元での行為論の実質的な新展開にとっても必須であり有効であると信じる理由があつてのことである。」 vi・viiP

(対話④)「社会科学者の中には「哲学屋さんはいから……」と言って、冷笑・憫笑(「びんしょう」のルビ)されるむきもあるに違いない。だが、ここは、一介の哲学屋として、聊(「いささ」のルビ)か居直りめいた弁疎を挿ませて頂きたい。哲学屋がいかに酔狂でも、一切合財の基礎的概念・基礎的命題を再検討して掛かろうとするわけではない。実際問題として、もしそう試みるとすれば、迂路に迂路を辿り、背進に背進を続ける仕儀となることであろう。既成的観念・既成的命題の抜本的な再検討と再定式に挑む場合、そこには、そのことによって理論の実質的な新展開の“目途”、少なくとも“予感”がある。哲学屋といえども闇雲に基礎概念を掘り下げるほど酔狂ではない。しかも、本書において著者が“拘泥”している問題構制たるや、まさに「問題」であることが“学界”なおいて自覚されているたぐいの事共である。それら問題の解決が、実質的な学問的進展にとって、必須かつ有効と思える事情を“説明”するに方(「あた」のルビ)つては、アナロジーに訴えるのが捷徑(しょうけい)かもしれない。嘗つて旧くから、ユークリッド幾何学における平行線の公準が問題ぶくみであることが自覚されていた。また、ニュートン物理学における絶対的時間・絶対的空間の概念が問題ぶくみであることも割と早くから自覚されていた。が、さしあたり、ユークリッド流の平行線の公準やニュートン流の絶対時間・絶対空間を“取敢えずの前提”として理論構築が進められ、それなりの理論的進展が実現してきた。ところが、周知の通り、ユークリッド流の平行線の公準を抜本的に再検討することを介して非ユークリッド幾何学という新しいパラダイムに立った新展開が実現し、ニュートン流の絶対時間・絶対空間の概念を抜本的に再検討することを介して相対性理論という新しいパラダイムに立った新展開が現成したのであった。これらの故事とのアナロジカルな構制において、価値胚胎・他我認識・心身関係といった「問題ぶくみの構制」ないしアポリアの抜本的な再検討・再定式・解決を介して、理論的新展開が期せられるのである。——因みに、著者が本書において“拘泥”している一連の哲学的諸難題は、それがアポリアと成る所以の淵源が、「物心二元論」や「主—客」図式に象徴される近代哲学(狭義の哲学ならずして広く近代知)の基本パラダイムに発することが確認されているのであって、今や“哲学”においてのみならず、諸科学の新展開にとって桎梏となっている「近代哲学流のパラダイム」を超克するに当つての管制高地に位するのである。以つて、“退屈な”“無用の”“拘泥的”論議が“折角具体

的な事象に即した行論に夾雑” されているという印象を与える個所があるろうとも、暫時、何卒“お付合い” 下さるよう希(「ねが」のルビ)って止まない。本巻での論述は、全体としては、実証的な知見にも基いたかなり具体的な行論になっており、哲学系以外の読者にとっても「忍耐の限界内」に納っている筈である。」 vii-viiiP

第三段落——新しい論展開に当たって、対話を求めて注意喚起し叱正・批判を願うこと

ix-xP

(対話①)「著者にとって倅いなことに、本書第一巻は相当広範な読書界に迎えられ、文理各方面の専門家諸氏からも望外な程の反応を賜った。著者としては各方面に互る素人談義に忸怩(「じくじ」のルビ)たるものを感じつつも、博雅(はくが)の厳正なる御叱正を冀(「こいねが」のルビ)うや切なるものがある。本巻の場合、第一篇第一章第二節中で経済学上の価値に關説した論点や、第二篇第三章第三節中で法哲学に關わる論件に言及している点は、第三巻での敷衍(ふえん)を俟って叱正を仰ぎ度い所存であるが、随所における發達論的立言に關して、特に心理学・社会心理学・社会学の専門家諸氏の検討・矯正を仰ぐことが叶えば幸甚である。——読者の中には、著者が差当っての課題として「存在構造」論を標榜しておりながら、“發生論的・發達論的な議論を各所に夾雑せしめていること” 自体を、方法論的不斉合ではないか、と疑われるむきも却ってあるかもしれない。それゆえ、茲を藉(「か」のルビ)りて若干の釈明を挿んでおこう。著者は固(「もと」のルビ)より、發生論・發達論がそれ自体として重要であることを認めているとはいえ、門外の身でそれを正規に展開する存念はない。著者にとって、發生論的・發達論的な配視・論考は構造論的な把握のための“補助的” 手段である。發生論的機序や發達論的経緯が所産的構造態の把握にとって有効な知見を供し得ることは誰方(「どなた」のルビ)も否認されはすまい。その限りで發生・發達を配視しているのであって、著者としては方法論的不斉合を犯していない心算である。——發生論・發達論として中途半端な挿入的議論であっても、構造把握のための“補助的手段” としては目的を達し得る。その限りで、發達論的に十全に跡づけられていないことは許されるかと思う。しかし、過程的追跡の不十全ではなく、誤認・謬見は許されない。けだし、それは著者なりの構造把握に導くからである。以って、この部面での誤認・謬見は、構造把握そのことのありうべき誤謬と併せて、御叱正を頂き度いと願う次第である。」

ixP

(対話②)「この際、殊に社会学系ならびに心理学系の読者に願い上げておきたい事がある。それは著者が一種の「役割行為論」の構制を採っていることや、「模倣」という現象を相当に重要視していることや、「条件反射理論」を折々に援用してことなどに関わる。社会学史の知識を有(「も」のルビ)つ読者は、役割行為論の構制を採っているとか、模倣的現象を重視しているとか、レッテル風に知っただけで、「これは博物館物だ」と速断してしまわれるのではないかと惧れる。しかし、著者はいかに不案内であるとはいっても旧套の役割理論や旧套の模倣理論をそのまま踏襲していない。別稿「役割理論の構築のために」と題する長大な論文(これの総量は千数百枚、本巻以上の分量)を発表して(『思想』に一九八六年五月号から八八年三月号にかけて連載)、役割行為論を定礎し直し、模倣という現象とその機序についても把え返しを試みており、それに立脚しての立論である。何卒、速断的放擲(ほうてき)は姑(「しばらく」のルビ)く待って頂きたい。また、条件反射論を折にふれて援用す

るとはいつでも第一巻を繙読下さった読者には既に知られている通り、著者本来の立場は必ずしも生理学的決定論風のものではないこと、この原理的次元は今措くとしても、便宜的に条件反射理論に“仮托”する場合の“条件反射”が旧套そのままではないこと、このことを斟酌(しんしゃく)いただきたいと念う。」 ix-xP

(対話③)「総じて、著者は本書において、旧来の諸説と内在的に対質しつつ議論を立てようと志向している関係で(尤も、逐一旧来の学説を紹介しつつ批判を重ねるという手法においてではなく、理念型的に類型化したうえでの対質であるが)、旧来の概念装置や伝来の用語法と可及的に接点を持たせるように努めている。そのことが理解を得易くするどころか、却って寇(「あだ」のルビ)になって、著者の見解を旧来の概念装置や旧来の発想枠組の座標系に押込める形で“理解”されてしまう危険があることかと虞(「おそ」のルビ)れる。著者としては、導入部では旧来の用語法に便乗・仮託している場合があっても、臆(「や」のルビ)がては定義的に既定し直して論述を進めるよう心掛けている。この間の事情を諒とされ、著者自身の座標系と用語法に即して御理解ねがいたいものである。既成理論への射影で以って能事足れりとされることのなきようお願いあけておく。」 xP

第四段落——第一巻発刊以降の十余年間に発表・公刊してきた一連の論文・著書 x-xxP

(対話①)「著者がここ十余年間に発表・公刊してきた一連の論文・著書をその都度に一読下さった読者におかれては、本巻既発表論点の集大成にすぎないとの印象を懷かれるかもしれない。著者自身の心意では新規の論点が相当に盛られている賦(「つもり」のルビ)ではあるが、既発表の試論を精緻化しつつ集約した部面も存在することは確かである。今爰で、旧稿・旧著と重複する点のあることの弁解はしない。また、本巻の公刊が遅延したことの弁明もしない。が、著者は本書を余りにも厩大化することを回避したいという念もあって、本書でもう少しは詳しく論じてよいはずのところ敢えて割愛した事項などもある。それゆえ、好意ある読者が本書を補完する含みで既刊の拙著を併読下さる折を念頭に置いて、別著との布置関係について茲に若干補綴(ほてい)しておこう。」 x-xiP

(対話②)「顧みるに、著者は、第一巻を公刊して以後、第二巻および第三巻の構案を、一つには事象的知識を詳密化することで、もう一つには既成の理論と反照することで、自家点検し協固めしようと図ってきた。その作業の一部は、折々の独立論文ないし対談・座談(多くは特集その他の機会に雑誌の編集部から需められたのに応えたものであるが)の形や自発的な連載論文の形を通して、或いは亦、独立の著作(これも書肆(しょし)の企画に“乗った”場合が多い)の形を通して、遂行・発表してきたのであった。——尤も、この十年間に発表した論著には「時務」に應えたり、編集者への“義理”を果たしたりしたものであって、『存在と意味』とは直接関係のないものもある。また、本巻と直接に関係するものでも、ここでその全てに言及するつもりはない。——第二巻の刊行に先立って著者がどのように準備してきたかの情報を提供し、御参考に供する趣意で、略々(「まぼ」のルビ)時系列に沿う形で“告白的”に陳べておく。」 xiP

(対話③)「偕、著者は、第一巻を刊行した直後に「記号論の哲学的次元」(『理想』一九八三年一月号)を発表し、第一巻で論じた「能記—所記」関係の場面から、言語行為や言語規則の問題次元への配視へと論考を進め、「表現—理解」関係および、「規則—随順」関係について卑見を叙べた。実践論にとって、記号・言語活動、そこにおける「表現—理解」や

「規則—随順」がそれ自体として重要であるばかりでなく、言語活動が或る種の社会的行為論において“モデル”的に遇されていることを意識し、いわゆる“言語ゲーム・モデル”の社会論との対質への伏線を敷こうという意趣をも籠めた。(著者はこの翌年すなわち八四年に言語学者丸山圭三郎氏との対談「文化のフェティシズムと物象化」[『思想』四月号]の機会を得、さらに翌年、同じく氏との対談「コトバと権力と生の円環運動」[『思想』四月号]の宣を得た。この二回の対談を共著『記号的世界と物象化』[情況出版、一九九三年刊]の形で上梓(じょうし)するに当り、当該の論文「記号論の哲学的次元」を併録しておいた。)——その翌月には「精神の間主体的存在構造——“精神異常”の存立構制の定位のために」(『思想』八三年二月号)を發表し、「実践的世界と役割行動」に即しつつ「精神異常の構造的定位」を企てた。この論文は、それに先立つこと五年の、精神病理学者・宮本忠雄氏との対談「現代心身関係論の地平」(『現代の眼』七八年十月号、その後『学際対話・知のインターフェイス』青土社、一九九〇年刊に収録)とも同様、いわゆる精神病態を論件とするものではあるが、むしろ別稿「<自己—他己>論への序奏」(『臨床精神医学』国際医書出版、一九八一年五月号)とも同様に、「他我」認知が「自我」意識にとっての存在条件であることを説き、更には「自我」「他我」概念の多階性・多次元性について卑見を述べたものである。(この論文は、その後『哲学の越境——行為論の領野へ』勁草書房、一九九二年刊に、その第八章の形で採録。)——その翌月には「物象化論の構制と射程」(『思想』八三年三月号)を發表し、マルクスに即しながら「社会的関係の物象化」「歴史動態の法則性」「物象化批判の方法と視座」などを論じておいた。(後ほど誌す『物象化論の構図』に収録。) xi-xiiP (対話④)「八三年は、——マルクス没後百年に当たったので、新聞・雑誌類の需めで相当数のマルクス論を執筆したが、それは省く——七月に、フランス哲学の専門家・港道隆氏との共著『メルロ・ポンティ』(岩波書店)を上梓し、十月には来日したJ・デリダ氏を迎えてのシンポジウムで発題者の一人を務め(於・日仏会館、発題は *Autour de la différence. traduit par Kazuhiro ADACHI*)、十一月には『物象化論の構図』(岩波書店)をも上梓した。——これらが、既成理論との反照において自説の再検討を図ったものであることは申すまでもない。哲学者の行動論というとき、そしてまた、単なる間主観性論ならざる間主体性論というとき、メルロ・ポンティこそが誰を措いても先ず参照・対質に値することは衆目の一致するところであろう。そこで、「知覚的現相と共存」「身体的対自と対他」「相互主体性と実践」に即して「メルロ・ポンティの間主体性の哲学」を検討し、「現象学的限界」を見定めた次第である。著者は「フランス構造主義」や「ポスト・モダン哲学」にも無関心ではなく、故足立和浩氏の慫慂(しょうよう)を黙(もだ)のルビし難かったこともあり、デリダ氏の既発表論著を可及的に検覈したうえで、遠来の客人への非礼に互(わた)らぬと思える範囲内で疑義的提起を試みたのであった。(後年のことになるが、やはり「ポスト・モダン」哲学の旗手であり、著者としては最も注目している一人、ピエール・ブルデュー氏が一九八九年二来日した折にも対談[『朝日ジャーナル』]および座談[『現代思想』]に臨んだ。これは氏が偶々拙著 *La philosophie de Marx (pour nous). traduit du japonais par Takashi Minatomichi. Actuel Marx N° 2. 1987. Paris* を眼にする機会があったとのことで、氏の側からの会談希望に由るものであったが、礼を失せぬ範囲で対質的言辞をも陳べた。今村仁司氏と三人での座談の記録は、加藤晴久氏編P・ブルデュー『超領域の人間学』藤原書店、

一九九〇年刊に再録。尚、拙著 *La philosophie de Marx* 《pour nous》の邦語元原稿は『ヘーゲルそしてマルクス』青土社、一九九一年刊において活字化。)翻って、著者の実践的世界論は、価値存立論・協働行為論・社会制度論・経済機構論・政治権力論・歴史法則論などの基礎論的場面において、マルクス物象化論に関わる自家了解を纏めるべく一連の旧稿をも含めて『物象化の構図』に輯(「あつ」のルビ)めたのであった。(尤も、マルクスの物象化論に関わる拙論は、別著『マルクス主義の地平』勁草書房、一九六九年刊、[一九九一年からは講談社学術文庫版もある]や『マルクス主義の理路』勁草書房刊、一九七四年刊、さらにはまた、『唯物史観と国家論』講談社学術文庫、一九九一年刊、などにも散在しており、この一書に全てを輯(「あつ」のルビ)めたわけではないが、『物象化論の構図』は『存在と意味』第二卷上梓への前梯性を強く意識したものである。)尚、八三年には「科学論の今日的課題と構案」(『思想』十月号)も発表しているが、これは方や『存在と意味』第一卷と係わり、方や遠く第三卷の第一篇「学理的世界の存在構造」とも係わるものであって、差当り第二卷とは直接に関係しないので、立入ることを省きたい。」xii-xivP

(対話⑤)「八四・五年は、前年八月の開腹手術の後遺症か、体調が優れず、両年とも広範に入院したこともあって、活字化した分量は多くはないが、経済学の再勉強と構造変動の機序についての省察に従事したのであった。経済学を勉強し直したのは、八四年の春に岩波市民セミナーにおいて『資本論』を読む』講座を担当し、また、名古屋大学経済学部に出講(集中講義)したことを外的機縁としてのものであるが、内発的には、それが第二卷での拙論の自家点検にとって必要だと痛感したからにほかならない。いわゆる近経をも含めて聊か勉強した所以は、経済学上の主観価値説をも射程に入れる配意もさることながら、“オークション・モデル”の問題性を対自化したかったからであり、古典派経済学に溯ったのは、“商品交換社会モデル”(社会理論・社会行為論において“言語ゲーム・モデル”と並ぶ“商品交換互酬モデル”の祖型とも謂うべきもの)との対質の地固めを意図してのことであった。マルクスの相対的剰余価値論や蓄積論を特に学び直したのは、協働とその連関の物象化の機制に留目してのものである。経済学の再勉強にもとづいて、経済学者諸氏との座談会「経済学のパラダイム転換を求めて」(『理想』八五年四月、経済学特集号)に臨み、また『資本論を物象化論を視軸にして読む』(岩波書店)を編み、「資本論における単純商品の意義」(『インパクション』第三八号)を執筆し経済人類学者・山崎カヲル氏との対談「唯物史観と生態史観」(『思想』十二月号)をおこない、『生態史観と唯物史観』(ユニテ、一九八六年刊、一九九一年からは講談社学術文庫版もある)の第二部「人類生態系と生産物交換」をも草した。——著者なりの“経済人類学・試論”とも謂うべき右記「人類生態系と生産物交換」中において既に原始貨幣の問題に関説しているが、その後にも「貨幣と信約的行為」(『現代思想』一九八七年八月号)を更(「あらた」のルビ)めて書き、「貨幣」の問題に著者が特段の留意を払っているのは、御賢察の通り、ハーソンスならびにルーマンの社会理論中における貨幣の位置づけや扱いを強く意識してのものである。——構造変動という問題の省察に従事したのは、著者も一定の留保条件つきで与(「く」のルビ)みする構造論的発想にとって“構造変動の説明が泣所”と言われる事情に鑑みてのことであった。この論件については、座談会「構造変動のパラダイムを求めて」(『理想』一九八四年九月号、前出の『学際対話・知のインターフェイス』に再録)において語り、論文「構造変動論の論域と射程」(『エピス

テーム』朝日出版社、第Ⅱ期第一号、一九八五年八月刊)を書いたほか、先に記した丸山圭三郎氏との対談やブルデューとの座談会についても関説している。また細胞生物学的な方面に論材を採った「超個体の形成と組織分化」(『エピステーメー』第Ⅱ期第二号、一九八六年一月刊)においても論じている。そして、実は、八三年から八六年かけて『インパクション』に分載した『共産党宣言』の思想や『季節』第十号(一九八四年二月刊)に寄稿した「ハブーフにおける人民革命の構想」など、革命運動論ないし革命組織形成論に関わる当時の拙稿も、構造変動の構制と機序を対自化しようとするモチーフを秘めているのであって、著者は“構造論的発想にとっての難題”の解決の目途を求めて腐心したのであった。その甲斐あって漸く成心を得、そこで八六年から第二巻の直接的な主題に関わる作業に復帰した。」xiv-xvP

(対話⑥)「八六年には、七月に『資本論を物象化論を視軸にして読む』および『生態史観と唯物史観』を上梓し、十月に、心理学者増山真緒子氏との共著『共同主観性の現象学』(世界書院)を発刊したのであったが、二月に「表情現相論・序説」(『現代思想』、後に前記拙著『哲学の越境』の第一章として収録)を発表、また、「ドイツ・イデオロギー内部論争・解説」(『ヘーゲル左派論叢』、お茶の水書房刊、第一巻への編者解説、後に前掲拙著『ヘーゲルそしてマルクス』に収録)や『共産党宣言』の思想——本邦未紹介資料の披露を兼ねて(『インパクション』)の連載第一部の“最終回”を活字化したほか、十二月に文化人類学者・田辺繁治氏との対談「生態史観は人類史を再編できるか」(『現代思想』)の機会も得た。この年には、四月から連載「社会行為論ノート」を開始(『現代思想』八九年の十月まで、全十七回に及ぶ。これらのうち十二回分を『現象学的社会学の祖型——A・シュッツ研究ノート』青土社、一九九一年刊)、五月からは「役割理論の再構築のために——表情現相・対人応答・役割行動」(『思想』八八年三月号まで)の並行連載を敢行した。——この年次以降、片や発達心理学・行動発達論の事象的知識を精密化することでの自家点検、片やM・ウェーバーやT・パーソンズ、それにA・シュッツと彼以後の現象学的社会学派の社会行為論との参照による理論的周到化に着手した次第であった。」xv-xviP

(対話⑦)「八七年には、前年に開始した二大連載に関わる行動発達論的な事象的研究と先行社会学における社会的行為論の勉強に時間と労力の大半を注いだほか、長年の懸案で七六年このかた折々論じてきた「貨幣」の問題について省察(先に誌した「貨幣と信的行為」を発表)、また、旧著『資本論の哲学』の新訂・増補に従事した。この年度には、文化人類学者を中心とする学際的な「文化的プラクティスとイデオロギー共同研究会」(於・国立民族学博物館)に参加する機会を得たこともあり、学生時代から関心を懷いてきた文化人類学方面の勉強にも聊か取組み、この部面からも実践的世界についての卑見を点検・補全する作業を試行した。——『資本論の哲学』(旧版の版元・現代評論社出版部門の閉鎖に伴い、新版は勁草書房)の増補に関連して茲で一言しておけば、それは『資本論』の物象化論的構制の理解に主として係わる。マルクスの物象化論といえば、世間ではとかくG・ルカーチの“物象化”論の線に引寄せて理解されている憾(うら)みがある。しかし、著者に言わせれば、ルカーチ流のそれは、後期マルクスの独特の物象化論の構制を見誤っているものと厳しく指弾せざるをえない。尤も、著者として、マルクス解釈史上ルカーチの果たした役割を顧から否認するつもりはない。彼がマルクスの“物象化”概念を顕揚した当時、初期マルクス

の手稿類が未公開であったうえ、マルクス流のあいだでヘーゲルやヘーゲル左派についての教養が乏しかったりこともあり、マルクス研究者の「ヘーゲル—マルクス」関係の理解は甚だ浅薄であった。その間に伍して、彼ルカーチはヘーゲルとマルクスとの関係をより緊密に把え返して見せたのであった。彼は、そのさい、勿論、ヘーゲルとマルクスとを一視同仁にしているわけではない。がしかし、彼はヘーゲルやヘーゲル左派の「疎外論」の発想や構制とマルクスの物象化論のそれとを強くオーヴァラップさせる弊に陥り、“後期”マルクスがヘーゲル学派流のパラダイムを自己止揚して切拓いた折角の独自の境地を見失っている概(「おもむき」のルビ)がある。そのため、ルカーチにあつては疎外論と物象化論とが離接不全を来たしていると評さざるを得ない。(因みに、著者が、初期マルクスの研究に多大のエネルギーを傾注し、また、ヘーゲル左派の紹介と検討に過分とも思えるほどの労力を捧げてきた理由の一斑は、ルカーチとその垂流に因る「疎外論と物象化論との離接不全」を実証的研究にもとづいて矯正しようと図ったことにある。尤も、「疎外論から物象化論の論理構制へ」という著者の提題は、マルクスがヘーゲル学派的パラダイムを自己止揚することと相即的に切拓いた世界観的新地平を宣揚するものであつて、単なるルカーチ的な不全への批判に留まるものではないのだが……。)翻つて、ルカーチ“以前”のマルクス解釈家、『資本論』研究家たちは、ヘーゲル学派や初期マルクスに関する知識の貧困に却つて幸いされて(?),『資本論』のテキスト“のみ”を内在的に読解したことにおいて、マルクスの物神性論や物象化論の構制をルカーチよりもむしろ忠実に受留めていた面がある。第二インターキッテの理論家と謂われたカウツキーしかり、金融資本論のヒルファールディングもしかり、資本蓄積論のローザしかり、ロシアにおいてもレーニンの論敵ボグダーノフしかり、ブハーリンしかりであつた。(日本においても、一時期の河上肇がしかりであつた。)そして、誰よりも、ロシア革命後のソ連における最高の理論経済学者と讃えられた時期のあるI・ルービンがそうであり、スターリンによるルービン粛清期における「ルービンの論敵の代表A・コーン」でさえ一時期にはやはりそうであつた。ところが、著者は、誠に恥多きことながら、『資本論の哲学』の旧版(一九七四年)を公刊した当時、右の事実に全く気がついていなかった。半ば弁解すれば、世の研究者たちが右の事実に気づき始めたのは、スターリン一派によって抹殺され、全く忘れ去られていたI・ルービンの著書『マルクス価値論・概説』がアメリカの新左翼系の学者の手で発掘・英訳されたことを機縁にしてであつた。尤も、ルービンを“発掘”した米・独の学者たち自身は、ルービンの物象化論をルカーチやフランクフルト学派のそれに近い線で“評価”したものの如くではあるが。著者が不明を愧(「は」のルビ)じる所以のものは、旧版に先立つ七二・三年にはルービン“発掘”が既に始まっていたにもかかわらず、そのことを全く識らなかったサーヴェイ不足にある。そして、これは旧版の公刊以後のことに属するが、本邦においても佐藤金三郎氏の手によってルービンの文献の何篇かが邦訳されるに及び、そこでは、著者が『資本論の哲学』において新発見気取りで聊か得意気に論じた「ベイリー—マルクス」関係も既にルービンの論究事項の内に属していたことを知ることができる。但し、著者としては、ルービンの所説に全面的に服庸(ふくよう)するわけではない。以つて長大な増補部を追加して、『資本論』の物象化論的読解が著者独りの異端的解釈ではなく、却つて研究史上の基調的路線に連なるものであることを確認しつつ、且つ、ルービンに対するスタンスを表明し

た次第である。(尚、ルービンの主著『マルクスの価値論・概説』の各版テキストクリティークと詳密な訳註付の邦訳が竹永進氏の手で進められており、近く法政大学出版会から公刊される由。)『資本論の哲学』の新訂・増補版については、追補した「補註」(6)、(9)に誌したJ・モストの『資本論入門』の改訂第二版における“価値形態論”の部分が、実は、マルクス本人の執筆になるものであることが考証され、これを参酌するとき、『資本論』の「価値形態論」に関する解釈・論争の様態が一変する筈であること等、この場で論及したい事項が多々あるが、今爰では禁慾する。(この論件については吉田憲夫氏の論文『「価値形態論」の地平」、月刊誌『情況』情況出版、一九九三年十月号所載、を併せて参看されるよう推輓(すいばん)したい。)」 xvi-viiiP

(対話⑧)「八八年には、『新哲学入門』(岩波新書)および『哲学入門一步前』(講談社現代新書)を上梓した。これらは『存在と意味』第一巻への“入門”書としても機能しうることと念うが、前者では、本第二巻との関係をも意識し、その第三章「実践するとはどういうことか」において「行為の存立構造」「実践の価値評価」「正義の成立条件」について論じておいた。——この八八年からは、西洋・中洋・東洋の歴史研究家諸氏に経済学者や政治学者をも交えた学際的な月例研究会に出席する好宜(こうぎ)にも恵まれ、歴史的知識と視野を可及的に有(「も」のルビ)って『存在と意味』を仕上げ度いという希求の一端を充たすようになった。(この研究会が縁で『これからの世界史』全十三巻、平凡社、一九九三年十一月より刊行開始、の一冊を担当する運びともなった。)」 xviii-ixP

(対話⑨)「八九年には、『身心問題』(青土社)および『表情』(弘文堂)を公刊し、本書『存在と意味』においては、第一巻のみならず第二巻でも“拘泥”せざるを得ない身心関係という論件についての独立の一書を世に送り、且つは亦、本第二巻では簡略に議論を運ぶべく、表情的現相(これは顔面表情といった狭義のそれではなく、広く情動興発性・行動誘起性の“籠(「こも」のルビ)った”実践場の世界現相)の定位、更には、狭義の表情的表出・理解、他者認識・自己覚識といった間主体的な問題場面について、これまた本巻を補助する筈の一書を上木したのであった。この年にはまた、「儀礼研究への方法論的前梯——物象化論の視座から」(田辺繁治氏編『人類学的認識の冒険——イデオロギーとプラクティス』同文館、所収)を發表し、プレ実働的／ヒポ実働的／メタ実働的な役割行為までを射程に入れ、「行為における事実性と価値性」「儀礼行為とその役割論的構制」「儀礼制度の体制内的統合機能」などについて論じ、本巻および第三巻の一部への脇固めを試みておいた。」 xixP

(対話⑩)「九〇年には、「社会主義諸国」の崩落に伴って時務的発言に迫われたが「東欧・ソ連の“変動”に思う」(『思想』二月号)、「“壁”崩壊後の歴史的課題情況」(『情況』復刊第一号)、「マルクス主義運動の新段階」(「フォーラム'90」会報・創刊号)など、四十年に垂々(「なんなん」のルビ)せんとする積年の思いの丈を述べ、また、『今こそマルクスを読み返す』(講談社現代新書)および『マルクスと歴史の現実』(平凡社)を世に問うて、一知半解な“マルクス葬送”の風潮に抗し、旁々(「かたがた」のルビ)、著者としてはマルクス理論のどこをどう継承的に展開しようと努めているかを表明したのであった。殊に編『二十一世紀の哲学』有斐閣、一九九二年刊、所載、および、「私にとってのマルクス経済学」、『経済評論』日本評論社、一九九三年五月[終刊]号所載と併せて)、本巻の論述を背景的に支えている「想い」を読者に分有していただく縁になりうるのではないかと念う。——この年

には、弘文堂刊『講座・ドイツ観念論』全六巻の編集委員の一人として、第三巻総説「カントを承けてフィヒテへ」、ならびに第四巻総説「自然と大我との統一原理」を執筆し、ドイツ観念論の非物理学主義的で且つ非要素主義的な動態的世界観との反照において、本書『存在と意味』の世界観を自己吟味する機会をも得た。」xix-xxP

(対話⑩)「九一年には、行文中で既に誌した『ヘーゲルそしてマルクス』および『現象学的社会学の祖型——A・シュッツ——研究ノート』の二著を公刊したのであったが、年末に業病の告知を受け、愈々(いよいよ)『存在と意味』第二巻の浄書原稿を急ぐことに意を定めた。」xxP

(対話⑪)「九二年には、入院加療と自宅療養の反復であったが、最小限の講義に出講しつつ、文字通り骨の想いで浄書稿の作製に邁進した。また、本第二巻への一種の“序説”的プロペドイティーク(プロペドイティーク: *Propaedeutik*, 「予備学」)として『哲学の越境——行為論の領野へ』を江湖に送っておいた。」xxP

第五段落——第二巻のこと xx-iP

(対話①)「以上の“告白的報告”からも察せられるであろうように、著者にとっては未だ「制度論」方面の事象的研究と持説の自家点検が手薄のままに残されている。そのことを自覚しつつも、浄書原稿の作製に着手したのであったが、本第二巻の原稿は第一・第二両篇だけで既に第一巻のそれに近い分量に肥厚してしまった。」xxP

(対話②)「茲に、第一篇ならびに第二篇の部分のみをひとまず活字化し、第三篇「制度的世界の存立機制」(この章・節については目次欄を一覧いただきたい)の部分は『第二巻(続)』という形で別冊とすることに予定を変更した。——続刊部を“第三巻”とせずに『第二巻(続)』とするのは、第一巻中のみならず一連の別著において第二巻第何篇・第三巻第何篇と予告的に誌してあるため、無用の混乱を招来しないように配慮してのことである。また、今般刊行する部分を“第二巻(正)”と標記せず、単に『第二巻』と標示しておくのは、後続部が未定稿集成に了らざるをえない場合を慮っての措置であるものと御諒承ねがいたい。」xxiP

(対話③)「第二巻第三篇(すなわち『第二巻(続)』)の印刷用浄書原稿の作製は、体力の見通しに応じて調整する所存であるが、事情にして若し幸い許すならば、今暫く、新規の研究と点検を経たうえでのことにしたいと念う。著者としては、幾つかの方面での事象的知識の獲得と精密化と併せて、デュルケーム学派の制度論の学び直し、グーテンベルクの“経営学”の勉強、N・ハルトマンの階層構造理論(*Schichtenbau Theorie*)の再検討、ルーマンのシステム理論との対質などは、最小限果たしたうえでの脱稿としたいところである。また、本邦における清水盛光氏の集団理論、吉田民人氏の所有理論を首(「はじ」のルビ)め、見田宗介・佐藤勉・船津衛・宮島喬氏などの業績、それにまた、今田高俊・橋爪大三郎・筒井清忠・大澤真幸・宮台真司などの労作——法哲学その他の方面にも是非とも参酌すべき業績の存在することは承知しているが——、最低限これら社会学者の達成に学び直し反照することが当為であると自覚している。望むらく寧日(ねいじつ)よあれ！」xxiP

第六段落——本巻の補完すべき著作 xxi-iiP

「本書は、議論は錯綜していても、論旨は明快であるものと自負するのだが、読者におかれてもし著者の意想を掴み難いと感じられるようなことがあれば、別著『世界の共同主観的存在構造』(勁草書房刊、講談社学術文庫版もある)の一読を願いたい。——尚、この旧著

は、テンプル大学のマイケル・サントン氏の手で目下英訳が進行中であり、遠からず当の英訳書が一種のコメンタリーとして役に立つことかと念う。——この第二巻の予備門(「プロペドイティーク」のルビ)としては、前記『哲学の越境——行為論の領野へ』(勁草書房刊)が便利な心算である。この別著では、本書では敢えて簡略に叙べた幾つかの論点について少々詳細に論じている趣きもある。『存在と意味』第二巻が、表情的世界現相から再出発する事情についても、同書の「はしがき」中の論述および第一章が一種の“序説”となる筈である。就いては参看を願う次第である。」xxi-iiP

第七段落——謝辞 xxiiP

「本巻を拙ない乍らも今日茲に上木できるに至ったのは、先輩・同僚・知友の鼓舞の賜物であり、亦、著者の作業の進行状況を明敏に察知しつつ準備・点検に資する論文や著書を鉛槧(えんざん)に上せるよう折々に懇慫(しょうよう)された雑誌・単行書の編集者諸氏の芳志・芳情の賜物である。本来であれば芳名を誌して感謝の辞を捧げるべきところであるが、割愛の非礼を何卒寛恕(かんじょ)頂き度い。／岩波の関係者諸氏に限っても多数の方々に謝辞を呈すべきところ、此の場では、『思想』の歴代編集者、伊藤修・野口敏雄・米浜泰英・合庭惇の諸氏、亦、折々に懇(「ねんごろ」のルビ)な督励を賜った大塚信一氏、病床を見舞って緩急の手綱を捌(「さば」のルビ)いて下さった合庭惇氏、直接に担当して頂いた高本邦彦氏、殊にこれら諸氏に誌して渝(「かわ」のルビ)らぬ深謝の意を表する。／一九九三年十月二十五日／ 廣松 渉」xxiiP

たわしの読書メモ・・ブログ 707 [廣松ノート (8)]

・廣松渉『存在と意味 2—事的世界観の定礎』岩波書店 1993 (2)

第一篇 用在的世界の四肢構造

第一章 用在的分節態の現前と財態の二要因

第一節 用在的財態の二肢性

(この節の問題設定—長い標題)「実践的な関心の構えに対して展(「ひ」のルビ)らせる世界現相の分節態(=用在的財態(「ツーハンデンザイエнде・ギューター」のルビ))は、その都度すでに、単なる認知的所与より以上の或るもの(価値性を“帯びた”或るもの)として覚知されている。われわれは用在態における所知的二契機を「実在的所与」および「意義的価値(「ベトイトザーメル・ヴェールト」のルビ)」と呼ぶことにしたいのであるが、用在的分節態はその都度すでに「実在的所与」以上の「意義的価値」として二肢的二重性の構制において、財態の相で、現前する。」5P

第一段落——“実践的世界の一相面”としての「実践的世界」 5-6P

(対話①)「爰に謂う「実践的な関心の構えに対して展らせる世界」(すなわち「実践的世界」)は、われわれが第一巻で主題とした「認識的世界」と、所与としては別箇に定在するものではない。——「認識的世界」すなわち「認知的な関心の構えに対して展らせる世界」なるものは、如実の実践的世界における実践的関心を捨象することに方法論的に抽出されたものにすぎず、謂うなれば、それは元々“実践的世界の一相面”にほかならなかったのだ

ある。——実践的世界の所知が認識的世界の所知(實在態)より以上であるのは、認識的所知(すなわち、たかだか「現相的所与以上の意味的所識」として措定されたもの)が抑々(「そもそも」のルビ)十全な世界現相より以下である所為(「せい」のルビ)なのである。実践的世界の所知的な分節態を「實在的所与より以上の意義的価値」として「財態」の相で捉え返すのは、認識的世界における捨象・過少を恢復・充当する所以のものにほかならない。」

5-6P

(対話②)「われわれは第一巻での所見を前梯としうる限りで、世界現相の認知相を辿り返すには及ばない。がしかし、第一巻における認識的世界観が出発点において方法論的に捨象した部面を再確認するためにも、フェノメナルな世界現相の直截的な体験の場面に一旦立返って、現相世界の如実相を直視する必要がある。」 6P

第二段落——「表情」——知覚的認知・情動価・行動価 6-11P

(対話①)「偕(「さて」のルビ)、直截的な体験に展らせる世界現相は、決して唯単に認知されるのではなく、「表情価」とでも謂うべきものを“帯びた”相で感得される。如実の原基的な体験相においては、森羅万象が一種の表情性を帯びている。いわゆる知覚は、本源的に「相貌性知覚」(すなわち、一種の「表情性の籠(「こも」のルビ)った知覚」)である。」

6P

(対話②)「右の提題は、今日の心理学においては定見と称して大過ないはずであるが、若干の敷衍(ふえん)を挟んでおくべきかもしれない。——人が、もし、表情という概念を「内奥的心態が体表的外面に表出されたもの」といった俗流的な定義(?)の線で云々するのであれば、万有靈魂論(「アニミズム」のルビ)の立場を採るのでもないかぎり、森羅万象が表情性を帯びているなどとは凡(「およ」のルビ)そ言うべくもないであろう、しかし、われわれとしては、無論、内奥的心態の体外的表出といった通俗的な表情観を採る者ではありえない。環界的現相が表情性を帯びていると謂うのは、それらが一定の情動興起性・行動誘発性を帯びた相で感知されるということの謂いである。或る種の理論的反省の立場からは、対象的現相が情動性・誘動性を帯びた相で見えるのは「感受主体たる自分自身の裡(「うち」のルビ)なる情動や傾動が“投射・投入”された一種の錯覚たるにすぎない」と評されるかもしれない。だが、当事者の直覚的な体験相においては環界的現相が一定の情動興起性・行動誘発性を帯びた相で感得されるということ、これは紛れもない事実である。(K・レヴィンの Aufforderungscharakter や J・ギブソンの affordance との位相差については別著『表情』弘文堂、一九八九年刊を参看されたい。) 6P・・・8-11P(小さなポイントの但し書き)参照

(対話③)「われわれは、暫く、当事者の反省以前的・直接的な体験的覚知事態に即して分析的な討究を進めておかねばならない。——世の論者たちは、とかく、知情意の三分法に泥(「なず」のルビ)んでおり、感性的体験に関して、「まず知覚的認知がおこなわれ、→それにとまって情動的興奮が生じ、→そこで一定の即応的行動が起始する」といった三段階の継起相で考えがちである。われわれとしても三段階の継起相で体験される場合があるということとは否認しない。しかし、反省的・事後的な区分は別として、直接的な体験にさいしては、そのような継起相で意識されるのはむしろ独別な場合であって、一般には、当の三継起が同時相即的に体験される。時によっては、例えば、まず急ブレーキを踏み、ゾッと恐怖感

がこみあげ、そこで横切って走り去る猫の姿が見える、といった逆の順序で意識にのぼることさえもある。知覚→情動→行動という継起性は、反省的定式ではありえても、体験意識相の常態を記述するものとは認めがたい。——われわれは、情動性というとき、喜怒哀楽といった格別なものにばかりでなく、情調・気分といったものにまで留目する。また、行動性というとき、いわゆる有意的な行動などの高次の行動ばかりでなく、反応性向といった次元をも配視する。そのとき、論者たちが、知覚的認知→情動的興奮→行動的反応と三段階に分ける第一段、すなわち“知覚的認知”と称される“局面”において既に一定の情動性や行動性が籠っていることが見て取れる。論者たちが第二段・第三段と称するものは、格別な情動的興奮や高次の行動的反応に止目するかぎりでは、慥(「たし」のルビ)かに第一段で既に籠っていたものとは別段の継起的局面として扱う必要もあろう。論者たちの謂う第二段・第三段がそっくりそのまま第一段に籠っていると言うつもりはない。場合によっては、第一段では、例えば、不快感や忌避性向が籠っていたのが、第二段では激怒感、第三段では攻撃行動となって現成する、といったケースもありうる。要は、俗見において第一段の“単なる知覚的現認”として遇されている局面にあつて既に籠っている情動価や行動価を逸せぬようにすることである。」 7P

(対話④)「議論の焦点を見え易くするために、俗に原基的な感覚的体験と称されているものに目を向けてみよう。——現実の感性的体験においては、ピカッ・キラッ・テカッ・チカッは音(「ただ」のルビ)単なる光覚ではなく、そこには一定の表情価(情動誘起価+反応性向価)が籠っている。ピカピカ・キラキラ・テカテカ・チカチカと表現してみればそのことが一層容易に納得されよう。同様に、白々(「しらじら」のルビ)・黒々(「くろぐろ」のルビ)・赤々・青々は音なる色覚ではなく、ネバネバ・スベスベ・ベトベト・ツルツルは音なる触覚ではなく、温々(「ぬくぬく」のルビ)・冷々(「さむざむ」のルビ)・熱々(「あつあつ」のルビ)・寒々(「さむざむ」のルビ)は音なる温度の感覚ではなく、コチコチ・フワフワ・ゴウゴウ・ブワブワは音なる硬軟の感覚ではなく、カラカラ・ジメジメ・サラサラ・グジグジは音なる乾湿の感覚ではなく、……いずれも表情性籠った現相である。直截的・原基的な体験においては表情性知覚こそが如実の体験相であり、俗に“要素的な感覚体験”と称される次元からして現相態は表情価を帯びている。(人々は色覚(「いろ」のルビ)・音覚(「おと」のルビ)・香(「におい」のルビ)……といった分け方で臨み、色覚を赤の感覚・青の感覚・黄の感覚……に分けることで原基的な体験を分析的に記述している心算になり、表情価を逸しがちである。が、われわれとしては、概念化的・分類化的把握に先立ち、まずは直接的な体験相を見据えねばならない。)」 8P

(対話⑤)「世界現相は特にこれというほどの表情価を帯びていない場合も慥かにある。がしかし、それら稀有な場合も、譬(「たと」のルビ)えば無色透明がそれ自身一種の色であるように、“無表情”もまた一種の表情にほかならないのである。世界現相が、森羅万象、一定の表情価を帯びているという構制は、われわれの観るところ汎通的である。」 8P

(小さなポイントの但し書き)「後論への伏線も兼ねて、茲で感性的体験の内具する行動性向(敢えて対象化した相で言えば、感性的現相の行動誘起性向)について特段の留意を求めている。／赤い色や激しい音が興奮させ、青い色や静かな音が鎮静させることは日常的にも実感できるが、ゴルトンシュタインとローゼンタールの今では古典的とも言うべき実証的

知見によれば、赤色光刺激を眼に与えると腕を伸ばそうとする運動が興発され、青色光で眼を刺激すると腕を体躯に引き寄せようとする運動が興発される。(Vgl. Goldstein und Rosenthal, *Zum Problem der Wirkung der Farben auf den Organismus*)。この行動誘起性の相違に因って(と説明されるのだが)、赤色光の視野の場合と青色光の場合とでは、指で測った長さ、手を動かした距離、掌に乗せた物の重さ、それにまた時間の長さなども相違する。／イングルとクックの研究によれば、カエルは飛び脱けようとしている隙間の幅が頭の一・三倍以下であると、ジャンプが抑止される。(D. Ingle & J. Cook, *The effect of viewing distance upon size preference of frogs from prey*, in *Vision Research*, 17, 1977) ホーリングの研究によれば、カサ貝が餌食となるバイ貝の攻撃を誘起されるか抑止されるかは、爾他の体調比でおのずと決まる。(C. S. Holling, *The analysis of complex population process*, in *Canadian Stymologist*, 96, 1964) 同様なことが人間(「ヒト」のルビ)にもみられるのであって、ワーレンとワンのおこなった隙間を通り抜けさせる実験によれば(W. H. Warren & S. Whang, *Visual guidance of walking through apertures*, in *Journal of Experimental Psychology, Human Perception and Performance*, 3, 1987) 隙間の幅が肩幅の一・三以上の場合とそれ以下の場合(先のカエルの場合と同じ数値!)とで、解発される運動様態が一変する。すなわち、一・三倍を超える場合には真直な姿勢で通り抜けるが、一・三倍以下になると、おのずと肩を左右に捻(「よじ」のルビ)って進む運動が誘発される。(以上の段落は、佐々木正人氏稿「身体はメディエイトしない」、『現代思想』第二十巻、第三号に拠る。)／J・ギブソンのアフォーダンスという概念がここであらためて留目される所以ともなる。——ギブソンの新造になる *affordance* という概念は、第三者的にみると、M・ハイデッガーの用材性(*Zuhandenheit*)という概念とも親縁であり、遡ってはフォン・ユクスキュルの環界(*Umwelt*)とりわけ *Wirkwelt* (作用世界)の契機と近似するところがある。本人は、ゲシュタルト心理学派のK・レヴィンの謂う要求特性(*Aufforderungscharakter*)。この概念が、J・F・ブラウンによって *invitation character* [誘発特性]、D・K・アダムスによって *valence* [誘発性と英訳された])および生態学に謂うニッチ(*niche* ニッシェ)という概念を批判的・継承的に改作したものと自己規定している。——／ギブソンによれば、ゲシュタルト心理学派の謂う要求特性・誘発性は、経験を通じて後天的に「観察者の要求に応じて対象に付与されるもの」とされていた。「コフカは、郵便ポストは観察者が手紙を送りたいと念うときにのみ誘発特性をもつことになると論じた。人は送りたい手紙を持っているときに限ってポストに惹きつけられるのであり、……物の価値は観察者の要求が変わるにつれて変化する、とされる」。だが、彼がアフォーダンスと呼ぶ誘発特性は「観察者の要求が変化しても変化しない」。「観察者は、自分の要求に応じて特定対象の特定対象のアフォーダンスを知覚したり、それに注意を向けたりするかもしれないが、アフォーダンスそのものは、不変であり、知覚さるべきものとして常にそこに存在する。アフォーダンスは、観察者の要求や知覚するという行為によって対象に付与されるのではない。対象は、それがいかなるものであるかによって、それがなるところのものを提供する。対象はそもそも一定の意味や価値を所有しているのである。但し、これは[生態学的に規定されるたぐいの]新しい種類の価値である」。——「生態学では、ニッチは、動物にとって適切な、比喩的にいえばその動物がフィットする環境の特徴の一セット」であるが、ギブソンに言わせ

れば、「ニッチとはアフォーダンスのセット」にほかならない。動物心理学者は動物はそれぞれの種に固有な主観的世界に棲んでいるかのように論じるが、アフォーダンスのセットであるニッチは主観的環境ではない。アフォーダンスは、主観的な価値や意味というよりも、むしろ客観的な価値や意味なのである。尤も、この言い方は正確でない。「実際には、アフォーダンスは客観的特性でも主観的特性でもない。あるいは、その両方であるのかもしれない。アフォーダンスは、主観的—客観的の二分法の範囲を超えており、二分法の不適切さを我々に理解させる助けとなる。それは環境の事実であり、同様に行動の事実でもある。それは物理的でも心理的でもあり、あるいはそのどちらでもないのである」(J.J.Gibson, The ecological approach to visual perception, 1979. 古崎敬・辻敬一郎氏他共訳『生態学的視覚論』サイエンス社、一九八五年訳刊、一三九頁、一五一頁)。／ギブソンは、このように、生態学に謂うニッチ、ないしはまた、動物心理学に謂う phenomenal environment (環境)を彼の仕方では捉え返すことにおいてアフォーダンスという概念を立てようとする。彼の意図は「環境に存在する事物の<価値>が直接的に知覚される」ということにある。／環境のアフォーダンスとは、環境が動物に提供(offer)するもの、良いものであれ悪いものであれ、用意したり備えたり(provide or furnish)しているものである。例えば、「大地の表面は、動物にとって攀(「よ」のルビ)じ登れるもの、……掴めるもの、突き当たれるもの、である。異なった配置(layout)は動物が異なれば異なった行動をアフォードし、かつ異なった動作をアフォードする。……平準・平滑で一定の広さと堅さを具えた面(surface)が膝の高さほどであれば、その面は腰かけることをアフォードする。それは岩棚のような自然物でもあるうるし、椅子のような人工物でもありうる」。「環境にあるさまざまな物(substance)は食物や製品に関し異なるアフォーダンスをもっており、異なる対象は操作に関しても異なるアフォーダンスをもっている。環境内の動物は……交互作用の豊富で複雑なセットをアフォードする。他人がアフォードするものは、人間にとってあらゆる種類の社会的意味を包含している」(前掲訳書、一三五—一三六頁)。／われわれが世界現相の行動誘発性というとき、ギブソンの謂うアフォーダンスに庶(「ちか」のルビ)いものを念頭に置いている。但し、価値というものが捉え方においてどこまで共通しうるか、どこでどう別れざるをえないかについては後論がおのずと示すであろう。」 8-11P

第三段落——世界現相の表情性体験 11-3P

(対話①)「世界現相の表情性体験と謂うとき、われわれは一応は「認知的知覚と情動興起性・行動誘発性との融合的感得」という言い方をする。或る種の反省的見地においては“認知的成分”と“情動的成分”や“行動的性向”とを区別することが許されよう。そしてその論脈においては「表情性感得は、単なる認知的知覚ではなく、それ“以上”の情動的成分や行動的性向をも含んでいる」という言い方も禁ぜられない。われわれ自身、便宜的には、「表情性知覚」とは「情動興起性・行動誘発性の籠った知覚である」と仮称しさえもする。(このさい「興起」は、当然、鎮静をも包摂し、「誘発」は抑制をも包摂する広義での謂いである。)」 11-3P

(対話②)「但し、「表情価」(単なる認知的所与より以上の表情価値)というのは、「情動的成分や行動的性向」の謂いではない。「情動的成分」や「行動的性向」は、レアルな成分やレアルな性向であるかぎり、「実在的所与」ではあっても「意義的価値」ではない。「情動

興起性や行動誘発性の籠った知覚」と称されるかぎりでの「表情性知覚」なるものは、そっくりその全体が「実在的所与」なのである。意義的価値の一斑たる「表情価」「表情価」は、後論を先取して一言しておけば、レアールな表情性知覚とは端的に存在性格を異にするイデアールな或るものである。誤解なきよう、この点は呉々も留意ねがいたいと念う。」

12P

(対話③)「われわれは、以上のところ、(1)まず、世界現相は汎通的に表情性を帯びた相で体験されることを述べ、(2)以って、如実に展らけている現相世界は、単なる認知的知覚より“以上”の情動的興起性・行動誘発性の“籠った”ものであることを指摘し、(3)但し、謂う所の情動的成分や行動的性向は、レアールな与件たるにすぎず、それがそのまま表情価なのではないことを叙べた。そして、(4)「情動興起性・行動誘発性の籠った知覚」、このレアールな「表情性知覚」は全体としてたかだか「実在的所与」であること、(5)われわれの謂う「表情価」は意義的価値の一斑なのであって、それは表情性知覚という実在的所与とは存在性格を異にするイデアールな或るものであること、このことまで構図的・暫定的に立言した。——猶若干のコメントを追録しつつ、議論を一步先へと進める運びとしよう。」

12P

(対話④)「抑々(「そもそも」のルビ)、実践的な関心の構えに対して展らける世界現相の分節態は、その都度すでに「実在的所与」以上の「意義的価値」として二肢的二重性の構制において、用在的財態の相で、現前すると唱するとき、この提題は何も森羅万象が表情価を帯びているということ自体を指摘しようと図るものではない。表情価は意義的価値中の低次の一斑たるにすぎない。——それにもかかわらず、敢えて直接的体験相におけるフェノメナルな世界の現前相に一旦議論を遡らせ、表情性知覚の汎通性(第一巻第一篇第一章第一節)においては、これを一瞬配視したうえで、論域の外に括り出していたに止目し直したのは、当然、故あつてのことである。今その理由を列举するつもりはない。が、(拙稿「役割理論の再構築のために——表情現相・対人応答・役割行動——」や別著『表情』を繙読された読者には納得していただけると念うのだが)、表情感得という日常卑近なこの機制が実践的世界の成立と存立にとって極めて重要であるという事実、これに鑑みてのものである。併せて亦、認知的所与と表情的価値との二肢的二重性の構制が汎通的であることを論定することによって、「実在的所与」以上の或る「意義的価値」性という構制の普遍性を挙示しうる、という事情もある。——われわれとしては、ともあれ、表情性現相の汎通性を揚言することにおいて、「実在的所与—意義的価値」の二肢的構制の普遍汎通性を立言した所以となる。」 12・3P

(対話⑤)「尤も、実在的所与より以上の意義的価値」と一口に括っても、実在的所与は多種多様であり意義的価値にも多種多様なものがある。われわれは下位的分類をも必要とする。が、両契夫々については次節および次々節で説述することにし、茲では用在的財態そのことを今暫くイラストレイトしておこう。」 13P

第四落——用在的財態のイラストレイト 13・5P

(対話①)「識者は、先刻来、K・マルクスの商品世界論の構制、そしてまた、M・ハイデッガーの用材論を連想しておられることであろう。著者は、慥かに——J・v・ユクスキュル、K・レヴィン、L・クラークス、K・コフカ、J・ギブソンなどもさることながら—

一、マルクスやハイデッガーを念頭に置いている。爰(「ここ」のルビ)は、素より、先学の理説を祖述・検討する場ではない。マルクスの価値形態論には後論において関説する予定であるが、当座の論脈と深く関わるのは彼の価値論よりも使用価値論であり、その点でむしろハイデッガーの用材論へのスタンスのほうが問題になる。このかぎり、ハイデッガーに一言論及し、用在という彼の詞を借用することから生じかねない誤解の防遏(「ぼうあつ」のルビ)を図りつつ、自説を反照的に隈取る縁(「よすが」のルビ)としたい。」 13-4P

(対話②)「「日常的世界内存在を、われわれは——とハイデッガーは言う——世界内での世界内部的な存在者との、交渉(「ウムガング」のルビ)とも呼ぶ。……この交渉の最も身近な様式は、認知ししかしないだけの認識作用(「エルケンネン」のルビ)ではなく、従事し使用する配慮である。」 14P

(対話③)「「ギリシャ人たちは“事物”を表わす適切な用語をもっていた。それは、プラグマタという詞であって、つまり、配慮的交渉(プラクシス)において関わるものの謂いである。尤も、ギリシャ人たちは、存在論的には、プラグマタのまさに特種<プラグマティッシュ>な性格を曖昧にしたまま、プラグマタを“さしあたり”“単なる事物”として規定してしまった。われわれは配慮において出会われる存在者を道具(「ツオイク」のルビ)と呼ぶ。……道具は本質的に<何々のための或るもの>である。有用性、寄与性、利用できること、手ごろであること、こういった<……のため>のさまざまな在り方が道具全体性を構成する。<……のため>という構造には、或るものの或るものへの指示(「ツエルヴァイズング」のルビ)が含まれている。」 14P

(対話④)「存在者のこうした存在様式が用在性である。この用在性ということは、しかし、……さしあたりそれ自体では物在的な世界素材が“主観的に色づけ”されたかのように、……単なる観方の特性(「アウトツァツァッスングスカラクター」のルビ)として解されてはならない。……用材性は<それ自体で>存在しているがままの存在者の存在論的・範疇的な規定なのである」(『Sein und Zeit, S.66-71)。」 14P

(対話⑤)「ハイデッガーの謂う用材性は、右の引用からも知られるように、それ自体では物在的な世界素材を主観的に色づけする観方の特性ではないとされており、それはそれ自体で存在しているがままの、存在者の存在論的規定であるとされている。この形式的・抽象的な規定に即するかぎり、われわれとしても、用在性というハイデッガーの詞を姑(「しばら」のルビ)く借用・襲用することができる。しかしながら、内容的・具体的に規定する段となると、われわれは彼の謂う用材性、ひいては、それと緊密な「有意義性(「ベドイトザームカイト」のルビ)」という概念を最早そのまま踏襲するわけにはいかない。(この件については少々(「やや」のルビ)詳しくは別著『物象化論の構図』 [岩波書店、一九八三年刊] 所収の「歴史的世界の物象化論」を参照されたい。)」 14-5P

(対話⑥)「われわれとしては、実践的世界を現前(「フォルコメン」のルビ)せしめる「実践的な関心の構え(「アインシュテルング」のルビ)なるものを、そもそも、ハイデッガーの「従事し使用する配慮」(das hantierende, gebrauchende Besorgen)よりも広く取る。このことに応じて、ハイデッガーの用材にあっては「配慮において出会われる存在者が<何々のための或るもの>=道具」に限局されるのに対して、われわれの用材はより広義のものとなる。しかも、ハイデッガーにおいては「或るものの[別の]或るものへの指示」が<……のた

め>という「目的—手段」連関であるのに対して、われわれにあっては“或るものの別の或るものへの指示”は<として>という「実在的所与—意義的価値」の等値化的統一の構制になっている。こうして、われわれの用材性は、内実的規定においてはハイデッガーのそれとは相覆わない。」 15P

(対話⑦)「われわれの場合、「実践的な関心の構え」において(つまりハイデッガー式に言えば「認知しかしなだけの認識作用ではなく、配慮的交渉(「ベゾルゲンデル・ウムガング」のルビ)において)出会う最広義の用材性が嚮に謂う「表情性」(すなわち「情動興起・行動誘発性」)なのである。」 15P

第五段落——われわれの謂う用材態 15-6P

(対話①)「われわれの謂う用材態は、最低次の意義的価値として汎通的に表情価を帯びており、それに加えて更に種々の意義的価値を担った相で現前する。——意義的価値の種々相の中に、ハイデッガーの道具的価値やマルクスの経済的価値も見出され、涯(「は」のルビ)では亦(「また」のルビ)、いわゆる道具的価値・経済的価値・宗教的価値のたぐいも看られる。が、これを視るためにも、財態の第一肢的与件＝実在の側を予(「あらかじめ」のルビ)め主題化しておくのが順路であろう。」 15-6P

(対話②)「尚、財態(狭義の財・禍の上位概念としての Güter)という概念は、学史上は、人格的存在と区別された物件的存在に限局されるのが普通である。がしかし、われわれは、いわゆる事物と人物とを二元的に峻別する以前の現相的分節態(心理学に謂う「図」に底(「ちか」のルビ)い分凝態)に定位して財態を立言する。従って、単なる認知的所与より以上の意義的価値を帯びた現相態でありさえすれば、森羅万象が財態と呼ばれうる。そして、高次の錯分節的統合態に関しても、それが別の分析視角のもとで物的と呼ばれうるものであれ心的と呼ばれるものであれ、はたまた、物件と呼ばれるものであれ人格と呼ばれるものであれ、具体物であれ抽象態であれ、苟(「いやし」のルビ)くも意義的価値性を帯びているかぎり、ひとまず悉(「ことごと」のルビ)く財態に算入される。」 16P

(編集後記)

◆月二の発刊態勢、読書メモの『存在と意味』第二巻が終わるまでにはと思っています。
◆巻頭言は、参議院選の参政党への「躍進—ファシズムの蠢動」の危機感から、急遽一文を挿みまし。ポピュリズム右派は非論理的なのですが、シングルイシュー志向のひとたちは、そこで支持に取り込まれ、他のことを考えようとしません。また、「差別されるのはいやだ、差別する側になりたい」というところで、結局差別の構造の中に取り込まれていくのです。差別を容認することは、暴力を容認することになります。差別の極としてひととひとが殺し合う戦争にまで至り着くのです。ヒットラーが『わが闘争』の中で描いたように、そして、安倍政治やトランプ政治が示しているように、たったひとりのひとが頭になり、そこへおもねる(忖度する)ひととひとのいびつな関係が生み出されます。「差別の構造」というところまで下向し、差別を総体的相対的にとらえ、反差別の立場性を確立していくしかありません。初期に抑え込まなくてはなりません。 実は、今回の巻頭言はあ

る講演会に参加して懐いたテーマで「社会主義者」と優生思想」という文を書き上げていてそれを載せる予定でした。急遽巻頭言を差し替えました。だいぶ時間が経ってしまったついでに、次々号 178 号の巻頭言に廻します。

◆読書メモは、『存在と意味』第二巻に入りました。読書—メモ取りは既に第二巻第一篇第三章三節に入っています。今年中に第二巻のメモ取りは終わる予定です。

反障害—反差別研究会

■会の方針

「障害学において、「障害とは何か」という突き詰めがなされないまま、議論の煮詰めもなされないままでした。そこから起きる混乱が、「障害者運動」の方向性を見出していく作業を妨げていました。イギリス障害学が障害の医学モデルから「社会モデル」への転換をなそうとしました。しかし、もう一段掘り下げた作業をなしえぬまま、医学モデルへの舞い戻りという事態が起きているようです。また、各国で差別禁止法とか「解消法」が作られていますが、そこでのモデルは結局医学モデルでしかない状態です。この「会」でやろうとしている議論・研究は、障害問題を解決していくための「障害者運動」のための理論形成の作業です。「会」としては「社会モデル」から更に、関係モデルへの転換を提起しています。実は、日本の「障害者」の間では、既にこの議論を先取りするような議論もなされていました。そのことが整理されないままになっています。改めてそれらのことともとらえ返ししながら、議論をすすめて行きたいとも思っています。また、障害と差別はかなり重なる概念です。他の反差別運動の中での議論や認識論的議論も織り込みながら、議論を進め理論形成していきます。そして、「差別はなくなる」とか「社会の基本構造は変わらない」という意識が、今のこの社会を覆っていきます。そういう中で、今の社会の枠組みに限定した議論になっていき、そのことが論の深化を妨げる事態も生じています。だから、過去の社会を変えようという運動の総括も必要になっています。そのことにも、差別ということをキー概念としながら議論・深化していきたいと考えています。(文責 三村)

■連絡・アクセス先

E メール hiro3.ads@ac.auone-net.jp (三村洋明)

反障害—反差別研究会 HP アドレス <http://www.taica.info/>

「反障害通信」一覧 <http://www.taica.info/kh.html>

反差別資料室 C <https://hiro3ads6.wixsite.com/adsshr-3>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>

反差別資料室 A <https://hiro3ads6.wixsite.com/adshr1>